

令和3年12月24日

学位（博士・言語教育学）申請論文 審査報告書

〈学位申請者〉 氏名 権 宇琦 学生番号 G7D5022017

〈論文題名〉 日中語彙交流の視点からみる近代和製医学用語の受容と交替

〈審査委員〉

主査 外国語学部教授 阿久津 智

副査 外国語学部教授 丸山 浩明

副査 成城大学教授 陳 力 衛

I. 論文の主旨

本論文は、近代和製医学用語を研究対象に、その日本における成立・普及と、その中国における受容・普及について、日中語彙交流史の観点から論じたものである。

本論文は、二部構成をとり、「概論」(1~2章)では、近代日中語彙交流史、および、近代和製医学用語について概観し、「各論」(3~6章)では、「結石」、「瘧疾」、「貧血」、「心臓病」の各語について、語誌調査を行っている。

その結果、「結石」、「瘧疾」は、江戸後期にオランダ語から訳された和製漢語で、「貧血」、「心臓病」は、明治初期に英語から訳された和製漢語であり、いずれも、明治後期に定着したとする。また、これらの語は、1890~1910年代に中国に伝わり、1930年代に定着が進んだとする。

II. 論文の構成

本論文の構成は以下の通りである。

序章

- 0.1 本研究の対象・目的・方法
- 0.2 本研究の背景
- 0.3 本論文の構成

第1章 近代日中語彙交流史概観

- 1.1 近代日中語彙交流史
- 1.2 近代日中語彙交流史研究

第2章 近代和製医学用語概観

- 2.1 日本医学史・医学用語史
- 2.2 近代日中医学用語交流史
- 2.3 近代医学用語の研究
- 2.4 本論文の位置付け

第3章 「結石」

- 3.1 はじめに
- 3.2 「結石」とは
- 3.3 「結石」と関連する言葉
- 3.4 「結石」の成立
- 3.5 日本語における「結石」の普及

3.6 中国語における「結石」

3.7 まとめ

第4章 「痙攣」

4.1 はじめに

4.2 「痙攣」とは

4.3 「痙攣」の成立

4.4 日本語における「痙攣」の普及

4.5 現代日本語における「痙攣」

4.6 中国語における「痙攣」

4.7 まとめ

第5章 「貧血」

5.1 はじめに

5.2 「貧血」とは

5.3 「貧血」の成立

5.4 日本語における「貧血」の普及

5.5 中国語における「貧血」

5.6 まとめ

5.7 「虚血」と「貧血」

第6章 心臓病

6.1 はじめに

6.2 「心臓病」とは

6.3 「心臓病」の成立

6.4 日本語における「心臓病」の普及

6.5 中国語における「心臓病」

6.6 中国語における「心病」

6.7 日本語における「心病」

6.8 まとめ

終章

参考文献

Ⅲ. 本論文の概要

序章

序章では、研究対象、研究目的、研究方法、研究の背景、および論文の構成について述べている。

研究対象は、近世和製医学用語で、研究目的は、①その創出の理由、②その普及・定着のようす、③その中国における受容過程を明らかにすることで、研究方法は、先行研究に基づき、近代和製医学用語について概観し、いくつかの標本語を調査対象に定め、文献資料を調査し、研究目的①～③について、分析・考察を進めるとしている。

本研究の背景として、今日、日中両言語間には、共通する医学用語が見られるとともに、異なる医学用語も使われており、こういったものが、日本語学習者（とくに生活者としての日本語学習者）にとって、必要な学習項目になると思われると述べている。また、日中語彙交流史の観点から、「新漢語」（日中両言語における翻訳語のうち、日本語において蘭学伝来以降に成立した漢語、および、中国語において 16 世紀後半以降に成立した漢語）としての「近代和製医学用語」を取り上げる意義についても述べている。

第 1 章 近代日中語彙交流史概観

第 1 章では、先行研究を参考にして、近代日中語彙交流の時代区分を行い、近代日中語彙交流史とその研究史について概観している。

近代日中語彙交流史とは、日中両国において、西洋の新知識を吸収するために創出した新語が、書物を通じて相互に移入してきた歴史である。

時代区分については、第 1 期（16 世紀後半～19 世紀初頭）、第 2 期（19 世紀初頭～1880 年代）、第 3 期（1890 年代～1920 年）という 3 区分を行っている。第 1 期は、中国で漢訳洋書（前期洋学書）の刊行が始まったが中断し、遅れて日本で蘭学書の翻訳が始まった時期で、第 2 期は、中国で来華宣教師たちによる出版（後期洋学書）が行われ、そこで造られた大量の漢語が日本に伝わった時期で、第 3 期は、日本で造られた大量の和製漢語が、書籍を通して中国に流入した時期である。

近代日中語彙交流史の研究は、日本人学者により新漢語の研究として始まり、近年では、中国人学者を中心に、日中語彙交流史研究として行われている。

第 2 章 近代和製医学用語概観

第 2 章では、先行研究を参考にして、日本医学史・医学用語史、近代日中医学用語交流史、近代医学用語の研究を概観している。

日本の医学は、古くから、中国伝統医学の影響を大きく受け、医学用語も取り入れてきたが、16 世紀中期にヨーロッパの医学が渡来し、『解体新書』の翻訳刊行（1774）以降は、オランダ医学が興隆し、その医書の翻訳によって、多くの医学用語が造語された。明治以降は、イギリスやドイツの医学が採用され、しだいに医師の資格制度も整い、医学用語も

学界で制定されるようになっていった。

近代日中医学用語交流史においては、第1章で見た近代日中語彙交流史と同様に、第3期に、日本の医学書が中国で翻訳され、大量の和製漢語が中国に伝わり、大きな影響を与えている。

近代医学用語の研究については、これまでの研究を、①近代医学用語の創出の視点によるもの、②日中語彙交流・日中史的語彙対照の視点によるもの、③学術用語・専門用語の選定の視点によるものの3つに分類してまとめている。そのうえで、これまでの近代医学用語の研究では、解剖学に関する用語が中心であったが、本論文では、『医学用語辞典』（日本医学会）の「MeSH (Medical Subject Headings) のカテゴリー」の「C疾患」と分類される「結石」、「痙攣」、「貧血」、「心臓病」を研究対象とし、以下の各章で語誌研究を行うと述べている。

第3章 「結石」

第3章では、「結石」について考察している。

「結石」は、江戸時代の蘭学者宇田川玄随がオランダ語「steen」の訳語としてつくった和製漢語であり、その翻訳法は、原語の直訳ではなく、病因や病状を示す漢字を組み合わせた意識で、その漢字の選定には、中国の『本草綱目』の「淋石」、「癖石」の項の影響が見られるとしている。

「結石」は、明治以降、しだいに普及し、明治後期にはすでに定着し、中国へは、英華辞典の編集、清国政府の官員の報告、教科書の編訳、雑誌における日本小説の翻訳・重訳など、いくつかのルートによって（以下の語も同様）、1900年代に伝わり、しだいに使われるようになったとしている。

第4章 「痙攣」

第4章では、「痙攣」について考察している。

「痙攣」は、宇田川玄随の養子、宇田川玄真が、「ひきつる」を意味するオランダ語「kramp trekking」の訳語としてつくった和製漢語であり、その翻訳法は、原語の直訳ではなく、病因や病状を示す漢字を組み合わせた意識で、その漢字の選定には、中国の『金匱要略』の「痙病」の項の影響が見られるとしている。

「痙攣」は、明治以降、しだいに普及し、明治後期には広く使われるようになり、中国の文献には、1900年代に現れ始め、しだいに使われるようになったとしている。

第5章 「貧血」

第5章では、「貧血」について考察している。

「貧血」は、明治初年に、桑田衡平が英語の「anaemia」の訳語としてつくった和製漢語「貧血症」から来ており、その翻訳法は、英語の語積「poverty of the blood」を日本語

に直訳し、それを漢字の組み合わせで造語したものとしている。「貧血」という形では、奥山虎章『医語類聚』(1872)に初めて現れ、『医語類聚』は、明治初期、英語を学ぶ医学生が愛用した辞書であったため、「貧血」の普及が促進されたと考えられるとしている(「心臓病」も同様)。

「貧血」は、明治後期には普及し、中国の文献には、1900年代に現れ始め、しだいに使われるようになったとしている。

また、「貧血」と似た語で、日本語でしか使われていない「虚血」についても、調査・考察を行っている。

第6章 「心臓病」

第6章では、「心臓病」について考察している。

「心臓病」は、明治初年に、奥山虎章が英語の「cardiopathia」の訳語としてつくった和製漢語であり、その翻訳法は、英語の語釈「heart disease」を日本語に直訳し、それを漢字の組み合わせで造語したものとしている。

「心臓病」は、明治後期には普及し、中国の文献には、1890年代に現れ始め、しだいに使われるようになったとしている。

また、中国に古くからあり、(日本では、主に、心の憂いや精神的な病としてしか使われない)「心病」についても、調査・考察を行っている。

終章

終章では、「結石」、「痙攣」、「貧血」、「心臓病」がなぜ創出され、普及したのかについて述べている。

これらは、いずれも、中国伝統医学にその病気・病状を表す用語があり、それが日本に伝わり、使用されていたにもかかわらず、和製漢語が造られ広まったとして、その理由について、①西洋医学書を翻訳する際に、その病気・病状を表すのに中国伝統医学の用語では不十分であった、②日本独自の造語法によって造られた、という点を挙げている。

また、これら4語が中国で普及した理由について、①来華宣教師による訳語より、和製医学用語のほうが、西洋医学の概念をより正確に、かつわかりやすく示すことができた、②大量の日本語由来の翻訳語が中国語に伝来・普及した時期に当たり、それを使う人が増えた、という点などを挙げている。

また、今後は、日中間で意味・用法の異なる医学用語を取り上げて考察し、その結果を言語教育にも活かしていきたいと述べている。

以上が本論文の概要である。

IV. 論文の総合評価

論文提出までの経緯

学位申請者は、2017年4月に本学言語教育研究科博士後期課程言語教育学専攻に入学し、修了に必要な10単位以上を取得、外国語（日本語）検定試験にも合格している。

博士論文完成発表会は、2020年12月19日に実施され、論文は2021年9月30日に受理されている。論文提出時の業績は、学内外の研究会誌における学術論文6本、学会等における口頭発表（博士論文中間発表会・完成論文発表会を含む）5本、計11本である。

論文の審査結果

審査委員による論文審査会を2021年12月4日に行い、審議の結果、全員一致で「合格」とし、続いて、同日、最終試験（口述試験）を公開で実施し、審議の結果、全員一致で「合格」と判定した。

V. 審査所見

本論文は、近代和製医学用語、とくに「結石」、「瘵瘰」、「貧血」、「心臓病」の4語について、その日本における成立・普及と、その中国における受容・普及について、主に日中語彙交流史の観点から、文献資料によって明らかにしようとした研究である。

本論文は、近代日中語彙交流史や医学用語史等について概観した「概論」と、上記4語の語誌を研究した「各論」とに分けられる。

「概論」は、主に先行研究に基づくものであるが、広く渉猟した資料を手際よくまとめており、いつどのように漢語・訳語が作られていくのかの背景を理解するのに有益な「近代日中語彙交流小史」、「日本医学用語小史」ともいえるべきものになっている。また、近代日中語彙交流史研究、医学用語史研究における本研究の位置づけが行われ、その研究価値が示されている。

「各論」は、オリジナルな調査研究であり、本論文における中核（主軸）に当たる。研究方法としては、「結石」、「瘵瘰」、「貧血」、「心臓病」の各語について、医学書、辞書、新聞、雑誌、文学作品、その他の文献資料を広く収集し、その記事・用例に基づいて、分析・考察を行い、それぞれの語誌を明らかにする方法をとっている。使われた資料には、日本語、中国語、オランダ語、英語などの（古典・原書を含む）文献が含まれる。分析・考察は、丁寧かつ堅実に行われており、各語の成立・普及・伝播・定着のようすがおおむね解き明かされ、各章がいずれも優れた独立した語誌研究になっている。よって、本論で明らかにされたことは、おおむね説得力をもつものと判断される。なかでも「貧血」については、本論文の白眉ともいえるべき考察であり、その成果は、尼崎市医師会のホームページ（「尼医ニュース」620号）で紹介されるなど、医史学の分野でも注目されている。

本論文の研究成果は、日本語辞書や専門語辞典などの記述に供するというもののほか、

日本語教育において医学用語を扱う際に役立つデータを提供するものと思われる。

なお、審査委員会からは、(今後の) 課題として、中国における医学用語の整理(選定)の歴史についても触れる、語構成について分析を丁寧に行う、疾病史の背景を盛り込む、計量言語学的手法を取り入れる、などが挙げられた。本論文からは学位申請者の研究能力の高さがうかがわれ、さらなる研究成果が期待される。

審査所見をまとめる。本論文は、「大学院学位論文審査基準」(「博士論文審査基準」)に照らして、①研究テーマ、②先行研究・文献資料・調査などの情報収集、③研究方法、のいずれにおいても、適切・妥当であり、④論旨も妥当であると認められる。⑤全体の構成、言語表現について、問題はなく、「論文」としての体裁が整っているものと判断する。⑥論文の内容について、独創性を有すること、当該学問分野の研究に幾ばくかの貢献をなすものであることは、上に述べたとおりである。また、学位申請者は、これまでに積極的に研究発表を行い、その方向性や方法論において一定の評価を受けてきており、今後、母国の大学で、研究・教育職に就くことを目指している。以上より、当委員会は、学位申請者には、高等教育機関で自立した教育者・研究者として活躍していく能力及び学識が備わっているものと認める。

VI. 審査委員会結論

以上、本審査委員会は、慎重・厳重な審査の結果を総合的に判断し、「大学院学位論文審査基準」(「博士論文審査基準」)に照らして、3委員全員が一致して、学位申請者に対し、学位「博士(言語教育学)」を授与することに同意するものである。